碩　心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認　可
神奈川　碩　心　会　発　行

63年12月号（197）
発行者
根岸岳萃
編集者
中村愛岳

63年12月現在会員数

逗子地区	173名
葉山地区	279名
大船地区	51名
（合計）	（503名）

詩吟との出合い

真澄支部　佐藤由風

例年になく不順な天候の続く夏でしたのに、道端の彼岸花が、季節を忘れずに炎の様な花をつけてくれました。

秋の査定も終り、ほっとして今までをふり返ってみますと、無我夢中の内に奥伝を受けさせていたゞける様になっておりました。

主人が会社で詩吟を始めた事がきっかけで、真澄支部に入れていただき、村田先生の熱心で、温情あふれる御指導と、支部の皆様の励まして、何とか続けることが出来ました。

温習会、地区大会等では、家庭にいては味わえない緊張を感じ、日頃の怠けを一掃され、新たな意欲を沸き立たせてくれます。

老後に主人共々詩吟詩舞をして過す日を楽しみに、又心新たに精進したいと思っております。

教場の先輩方と、心のふれあいを大切に、詩の心の深い所を見極めたいと思います。

◎叙勲

63年11月3日文化の日、松井岳洋先生が吟剣詩舞振興に寄与された功績に対し、木杯を賜与されました。おめでとうございます。

◎葉山地区温習会終る

11月27日(日)新装成った葉山町福祉文化会館に於て行われました。

落成後の使用第一号となり、不馴れな会場に、希望と不安、又諸般の情勢をみながらの今回は、気遣い、気苦労がありましたが皆様の協力で無事終了できました。又葉山地区役員の皆さんには色々御骨折りをかけ御苦労様でした。

◎64年度碩心会初吟会中止

例年一月半ば頃に行なわれる右会は、諸般の事情により、64年度は中止となりましたことをお知らせいたします。

◎64年度県本部初吟・初理事会

とき・64年1月29日(日)1時～4時30分
ところ・横須賀孔雀苑
（横須賀駅よりバス・ベース前下車）

三国史と三峡下りを訪ねる旅（その3）

加藤　岳相

七日目、六時にデッキに出たが辺りはまだ暗い。船は昨夜来岳陽に向けて走り続けている。河面の風がすがすがしい。三峡下りを楽しませてくれたこの船とも今朝でお別れだ。九時五分岳陽着、下船。そぼ降る小雨の洞底湖をバスの中より眺めながら岳陽市内へ。朝食後洞底湖に臨む中国三大名楼の一つである岳陽楼へ。ガイド嬢の説明を受けた後高橋岳壽先生が杜甫の詩「岳陽楼を望む」を代表で吟ずる。中国へ来て吟題と同じ場所で吟じられるなど感慨深かった事だろうと思う。岳陽楼を出て自由市場散策、衣料、食料品等雑多のものが並べられている。我々は人混みを縫うようにして三々五々見物して歩く。この市場をあとにして洞底湖を一望出来る波止場へ。然し生憎の曇天の為洞底湖の名勝君山（クン）もうっすらとかすんで見えるだけ。岳陽から武漢へバスで行く最初の予定が火車（日本の汽車）に変更され、我々は軟座車（日本のグリーン車に当る）にて武漢へ。夕刻であるが車窓より見る緑の田園風景は日本と変らない。二十時二十五分武昌（武漢）駅着、駅前広場には何か集会でもあったのかと思われる程多数の人がいるのにびっくり、さすが水陸交通の要点の地だなと思わせる。武漢は武昌、漢口、漢陽の三市が合併して武漢となったとの事。二十一時五分今夜のホテル長江の畔の晴川賓店へ。割当てられた部屋のカーテンを開くと武漢長江大橋の灯の夜景が美しい。対岸には黄鶴楼がほのかに見える。今回の旅行で期待していた処だ。明日の見物を楽しみに寝に就く。長江（揚子江）の涼風が気持ち良い。

八日目、八時四十分ホテル出発。朝から断続的に強い雨が降りしきる。今日は武漢市内観光、戦国時代の逸品がある湖北省博物館、戦国時代の憂国の詩人楚の屈原（教本第三集の高杉晋作作の獄中作の詩文にある）を祀ってある東湖々畔三層の楼閣の行吟閣（コウ）、屈原は此の景勝の地をこよなく愛したと言う。入り組んだ湖畔には梅や桃の木が点在し、それに揚柳の林、雨が降っていなければさぞ良い景色を眺められたろうにと悔やまれる。バスにて長江の畔蛇山にある黄鶴楼に。崔顥（カイコウ）の詩黄鶴楼を県本部長新田岳悠先生に指導された昔を想い出しながらだらだら坂を登る。中国独特の構築に茶褐色の屋根、朱の柱で五層の廻廊付きの建物である。武漢長江大橋（瀬戸大橋と同じように上は歩道と車道、下は鉄道と二段式）を作るのに移転させられ一九八五年に二年がかりで完成したとの事。記念撮影の後自由見学、楼上より見る長江周辺の景も素晴らしい。豪華な昼食（スッポン、カエル、鳩の丸煮スープ等）の後武漢書畫院、古琴台へ。春秋戦国時代秦の詩人が此処で琴を弾いていると楚の詩人がじっときゝほれ、年に一回同じ日に此処で逢う事を約して別れたが、二年目に楚の詩人は定められた日に来なかった。琴の弾き手秦の詩人は怒って琴を壊してしまったという伝説がある地。此処で今回の旅行の最後の観光となるので全員で漢詩を合吟して古琴台を辞す。今夜上海へ移動する為ホテルにて早い夕食を済ませて武漢飛行場へ。二十三時上海到着、最初の晩と同じホテルにて明日の無事帰国を祈りながら床に就く。

九日目、期待と希望を抱いて参加した中国旅行も今日でいよいよお別れ。各自思い思いの土産物を買い車道迄溢れんばかりの人混みの南京路をバスで観光しながら上海空港へ。十五時四十分日本航空七九六便にて成田へ、途中長崎空港に寄り十九時十二分成田へ到着した。迎えのバスにて横浜天理ビル前に到着したのは二十一時二十分、参加者全員元気で無事帰国した安堵の喜びと再会を約す挨拶を交しながら各自家路に

ついた。

終りに冒頭にも書いたように自分の目で実際に見、そして味わった三峡下り、洞庭湖、黄鶴楼等が見物出来た満足感と、中国の発展がいちじるしく進みつつあると感ぜられた事、及び一部の人であるが接した中国の人達が我々観光客に親切にしてくれた事等を想い出に、つたない旅行記を終りと致します。

（おわり）

江馬細香に一目ぼれした頼山陽

千葉　釼岳

今から一七五年前、文化十年（一八一三）十月、山陽は詩作の旅に出て、美濃国（現在の岐阜）に遊び、大垣において、当時儒医として有名であった江馬蘭斉に会った。蘭斉は娘の細香（名は多保（たお））を山陽の門に入らせた。

細香はいわゆる才色兼備の佳人で、詩作のみならず、書も画も極めて上手な人であった。山陽は明春再び京で会うことを心に期待して別れた。山陽は友人と大垣から木曽川を下った。友人は途中で下船し、山陽ひとり、行先は桑名である。山陽そのとき三十四才であったろうか。

「舟発大垣赴桑名」の七言絶句は、この時の作と言われる。

蘇水遙遙入海流　櫓声雁語帯郷愁
独在天涯年欲暮　一篷風雪下濃州

大意は皆様既に御承知のところであるが一応述べることといたしたい。

「木曽川は、はるかに遠く流れて、桑名で海に注いでいる。自分は今小舟に乗って下りつつあるが、舟の櫓の音や、空飛ぶ雁の声を聞くにつけ、故郷が思い出される。自分はひとり遠い地にあって年も暮れようとしている折、降りしきる風雪の中をわずかに篷（とま）の屋根でしのぎながら、一隻の小舟で濃州を下っていくのである。その淋しさはまた格別である。」

と言うことであり、当時の家族の事情なども考え合せれば、大いに理解できるところである。京都に帰った山陽は細香のことが忘れられず、小石なる人に送った手紙に「誠に子成（山陽）に偶すべき者と、再び得がたき様に存じ申し候」と述べている。

しかしながら小石氏は「妻が詩を詠み、画を描いていたのでは、家を成すことができない」と考えたのか!!その知人の疋田氏の娘の梨影（りえ）を妻とするよう勧めたようである。山陽は細香のことが忘れられずにしばらく悩んだが、間もなくこれを迎えることとなる。一方細香は、文化十一年二月、父の許しを得て京に上り、山陽との間を決定的にしようとして臨んだが、時既に遅く、山陽が梨影を迎えたあとであった。

細香は、落担することしきりであったがあきらめ、もともと山陽を師として心酔していたこともあり、終生その教えを乞うたが、期するところあってか、一生独身を通したと言われる。

かの有名な日本外史の大作に精魂をこめた山陽にも、恋に悩んだ一時期があったのである。因みに、山陽初婚の妻淳子は、山陽が以前に大志を抱き、所属藩を脱藩した際に実家に戻り、直後離縁となっていたものである。

（資料考誌頼山陽引用）

短い人生だから

憎みあっても人生悲しみにおぼれても人生
おなじ人生なら明るくいこうよ
小さな人間ひとりひとり短い一生なんだから
泣いてばかりいないで空の星を見ようよ
星はけんかしているかい泣いているかい
おなじ人生なら光っていようよ星のように
地球を愛し生きようよ憎みあっても人生
悲しみにおぼれても人生短い命なんだから…

「坂村真民」さんの詩より

練吟メモ

師走・除夜

○年配者にとって、歳末風景から「もちつき」が消えたのはなんともさびしい。でも世の中うまくできたもので、戦後はクリスマスが歳末気分を奏でてくれるようになった。季語に「師走」があるが、広辞苑では（陰暦十二月の異称。極月）とだけで、出典などなく、あっさり片付けている。そして用例の一つに「師走坊主」（歳末は世間が忙しいので、布施もないところから、おちぶれやつれている坊主）がある。

○現在市販の大方の辞典は、ほとんどが右同様である。だが、筆者などむかし小学校で教わった「師走」はそうでなかった。金田一春彦著「ことばの歳時記」の中で「師走とは、年の暮れであっちでもこっちでも坊さんを迎えて仏事を行なう。坊さんたちはあっちへ走り、こっちへ集まるというわけで「師はせ月」というのを、なまってシハスといったのがもとだったという説が人気がある」と書いている。前掲の用例とはまるきり反対の内容である。たまたま、この稿を書く直前に見た小学館の「現代国語例解辞典」の解説はまことに明解で感心した。師走の「語源未詳。当て字（師走）にひかれて（しはす）とも。」

○　除夜の作　高適（七六五没）

旅館の寒灯　独り眠られず
客心　何事ぞ　転た凄然たる
故郷　今夜　思いは千里
霜びん明朝　又一年

〔作者〕高適　李白や杜甫と旅行したことあり。当時の詩人仲間では一番出世した。

〔語釈〕寒灯（寂しげな灯）客心（旅人の心）凄然（すごく悲しい）又一年（また一つ年をとる。中国は現在もなお数え年）

〔大意〕宿のつめたいあかりで一人眠れずにいる。旅のおもいは何とまあ悲しいことか。ふるさとよ、今夜の思いは千里のかなたをかけめぐる。白くなったわが髪、明日になるとまた一年を加えるのだ。

○人間の心情は一二〇〇年前の唐の人達とあまり変らない。この詩わかりやすく、除夜を扱ったものでは知られている。問題は第三句、原句「故郷今夜思千里」の「思千里」の訓みと解釈。(1)(2)(3)とも可である。

(1)思いは千里　思いは、千里のかなたをかけめぐる。

(2)千里に思う　私は、千里もはなれた故郷に思いをはせる。

(3)千里を思う　故郷の人びとは、千里もはなれた私を思っている。

（支部長変更）
唐木山支部長214吉井道風を401鈴木要泉に
（名簿訂正）
21根岸シヅをシヅ子に
（入　会）
467小篠柳子　逗子市小坪七―二―十
（銀　詠）㊟〇四六七―二二―六八一四
468寺嶋俊男　逗子市桜山八―四―二十一
（逗子B）㊟〇四六八―七一―二八八九
469中坪昭義　葉山町長柄一四一三―一〇〇
（銀　詠）㊟〇四六八―七五―七四九七
（退　会）
91田上州風（大船B）
284山下誠山（大船B）
278髙梨憲山（大船B）
426黒川津泉（大船B）
214吉井道風（唐木山）
307深川東山（唐木山）
43磯部誠岳（長　柄）
367蒲谷源泉（諏　訪）
275増田鷲山（大船B）
281五十嵐政山（大船B）
402吉岡一泉（大船B）
217廣田功風（唐木山）
478磯部洋子（長　柄）
88須藤星風（下山口）

各地から早くも雪の便りがとゞき、冬の到来が早いようです。秋の終りから冬の初めにかけ、時はあわたゞしく過ぎてゆきます。三の酉まである年は火事が多いとか…ここのところよく木枯らしが吹きます。火の用心と風邪にはくれぐれも気をつけて、よいお正月を迎えられますよう。